

アカデミック・ライティングの観点からの小論文にみられる問題分析 —高大接続に向けて高校生と大学生が書いた3例を対象に—

荻田朋子

要旨

本研究では、高校生1名、大学初年次生2名が書いた課題文読解型小論文3例を対象に、評価者3名にループリック評価を依頼した。その評価と評価コメントをもとに、アカデミック・ライティング（以下、AW）の観点から小論文3例に見られる課題を探索的に考察した。その結果、対象とした高校生の小論文には①指定字数を満たさない、②自他の意見の区別および事実と意見の区別への意識が不足している、③自らの意見や事実文による論拠が十分ではない、④書き言葉の習得が不十分、⑤段落内・段落間の結束性・一貫性が弱い、⑥出題文への対応が不十分であるという課題が示唆された。AW歴の浅い大学初年次生の小論文にも④⑤⑥の課題が見られた。小論文を対象に調査し、AWから見た評価観点と評価に影響を与えている実際の文章の特徴との関連を明らかにすることは、高大接続の観点から「書く力」への教育的示唆を得る上で重要であると考えられる。

キーワード

課題文読解型、小論文、アカデミック・ライティング、高大接続、評価

1. 研究の背景と目的

近年、高等学校では新学習指導要領の導入に伴い「書く力」の育成が一層求められている（文部科学省 2021）。大学入学試験（以下、入試）においても、思考力・判断力・表現力を測る記述式問題が注目されており、小論文の重要度が高まってきている（文部科学省 2021）。しかし、日本語学研究や第二言語習得研究の中には大学生が書いた日本語意見文を対象とした研究の蓄積はあるものの、高校生が書いた小論文を対象とした研究は管見の限り十分ではない。日本語教育の視座からは、近年急増する外国人生徒への日本語指導が2023年度から制度化され、それに先駆け行われた日本語を母語とした高校生の作文調査の結果が公開された（東京外国語大学多言語多文化共生センター2023、以下、センター報告）が、実態の把握に留まり高大接続のための議論はない。高大接続とは、高等学校教育と、大学教育、両者を接続する大学入学者選抜を連続した1つの軸として一体的に改革するものであると定義されている（文科省 2017）。高大接続には大学入試がその一環として含まれ、特に小論文は大学の学修で必要なレポート・論文を書く力として重要な位置付けにあると考えられる。したがって、新学習指導要領や受験者の多様化という社会の動向に対応し、AWに円滑に橋渡しするためには高大接続の観点から高校生の小論文を対象とした調査が必要であると考えられる。特に入試を想定した小論文調査は各教育機関への波及効果が期待できる。また、得られた教育的示唆は日本人生徒だけではなく外国人生徒への日本語教育にも役立つと考えられる。

そこで、本研究では日本人高校生1名、大学初年次生2名（日本人学生・外国ルーツの

学生) が書いた課題文読解型小論文 3 例を対象に、小論文の問題点を明らかにし、高大接続に向けて AW の観点から「書く力」育成のための教育的示唆を得ることを目的とする。

2. 調査概要

本研究では、以下の出題文を基に原稿用紙に書かれた 800 字の課題文読解型小論文⁽¹⁾を対象とした。制限時間は 50-60 分、辞書等の使用は禁止した。課題文は文部科学省検定済教科書に掲載されている論説文の一つである宇野常寛 (2003)「おじいさんのランプ」である。この文章では新美南吉作『おじいさんのランプ』の童話を例に情報化に伴う人間と言葉との関係性の変化に柔軟に適応することの重要性を論じている。身近なテーマであり高校生でも理解できる難易度の文章を選定した。

出題文：

以下の文章を読んでください。下線部の「現代における情報化の進行は人類の文化そのものを大きく変化させようとしているはずですが。私たちは言葉というものの関わり方自体をいやおうなく問い直す時代に生きていて、その大きな変化のあくまで一部分として本や雑誌の問題がある、と考えたほうがいい。」について、具体的な例を挙げながら、あなたの意見を 800 字程度で書いてください。

調査協力者は、「No. 1 大学1年生、レポート執筆経験あり、国際バカロレア認定校（以下、IB）出身者」「No. 2 大学1年生、レポート執筆経験あり、普通校出身者」「No. 3 高校2年生、レポート執筆経験なし、普通校在籍者」の日本語母語話者3名である。その内No. 1の協力者は英語と日本語のバイリンガル話者であり、英語でのレポート執筆経験がある。

調査方法は次の 3 段階で行なった。(1) センター報告にある課題文のループリックを用い⁽²⁾、評価者に評価を依頼する。センター報告の「課題文」のループリックは「書き手の主張が正しいこと、真実であること、納得できるものであることを、与えられたテキストを引用したりしながら論じる」という作文課題に対して作成され、教育的示唆を得ることを目的として特性（トレイト）が設定されており、本調査の対象とする課題文読解型小論文と目的を同じくするため採用した。本調査では「タイトル」を除外し、代わりにセンター報告では意見文特有のトレイトとされる「説得力・根拠」も小論文では重要な評価観点であると判断し加えた。評価は 5 段階である。(2) 評価結果をもとに評価者に判断の理由についてインタビューを行い、評価者のコメントを記録する。(3) 評価者のコメントおよび文の機能をもとに評価に影響を与えている文章の特徴について分析する。文の機能は言語形式上の特徴を指標に文が文章を形成する際に文脈を帯びて獲得する機能を示したものである。一貫性、結束性、説得力の評価が何に起因するものか考察するための一つの指標として役立つと考えた。文の機能は荻田 (2021) の基準に沿ってコードを付した。荻田 (2021) は意見文を対象に文章構造を解明する手段として木戸 (1992) の文の機能を再考し分類基準を設定している。文の機能は意見（主張①②・評価・理由）、事実（根拠・報告・解説）、メタ言語文「提示」の 8 つに分けられている。

評価者は、某国立大学大学院生 3 名（A、B、C）である。査読付き日本語学術雑誌へ論文が掲載された経験があり、AW で求められる書く力について十分な知見を有している。評価者のコメントを踏まえることにより小論文 3 例に含まれる AW の観点からの問題点が明らかになると考えた。

3. 結果

表 1 は評価者 3 名による評価の平均値を示している。評価は 5 段階（5：非常にできている、1：できていない）である。高校生が書いた No. 3 の小論文とセンター報告の評価（平均点）が近いため、本調査では No. 3 を一般的な高校生の小論文と見なし、大学生が書いた No. 1 と No. 2 と比較することにする。No. 3 と比較して 0.5 以上差があり、かつ評定が変わるものを太い枠線と太字で強調した（表 1）。

表 1 評価者 3 名による評価の平均値

調査協力者 トレイト	No. 1 865 字	No. 2 798 字	No. 3 459 字	センター報告 610 字 ⁽³⁾
日本語	3.87 ↓	3.45 ↓	4.43	4.68
一貫性	2.33 ↓	4.67 ↑	3.67	3.75
結束性と構成	3.00	3.83 ↑	2.83	2.95
レトリック	2.33	3.33 ↑	2.00	2.38
ヴォイス	2.67	2.67	2.33	2.78
読み手意識	3.33 ↑	3.33 ↑	2.67	2.85
説得力・根拠	2.67	3.67 ↑	2.33	1.78
引用	3.00 ↑	2.00	2.00	2.40

以下、評価コメントと評価に影響を与えている可能性のある文章の特徴を考察する。

3.1 No. 1 の小論文の結果と考察

表 2 は No. 1 の小論文である。一文ごとに改行し行番号を左列に書き、形式段落には太い実線を引いた。課題文との重複表現には網かけ、意見の指標に点線を付し、引用の指標を太字・斜字とした。右列は文の機能である。No. 2（表 3）、No. 3（表 4）も同様に示す。本文中では評価者のコメントは「」、文の機能は<>、ループリックのトレイトは【】を用いて説明する。No. 1 は、865 字と字数指定を超えている（表 2）。

表 2 No. 1 大学 1 年生、レポート経験あり、IB 出身者の小論文

1	この小論文をまとめると古いものには古いものの良さがあると言う主ちょうは新しい物においぬかれています事実から目をそらすための意見である。	論点の整理
2	人類の文化の進行はいやおうなくおとずれるためこれに適応することができる知性が必要である。	
3	筆者の主な主ちょうはこの二点であると私は考える。	
4	私は 2 点の主ちょうに賛同している。	主張①
5	現代社会では古くからのしきたりなどが新しい可能をつぶしている と考える。	理由
6	例えば部活内での人間関係が 良い例だ。	理由
7	あまり年がはなれていない先輩に対して敬語を使う。	根拠
8	これにより上下関係ができ、部内のきりつが保れる。	解説
9	しかし逆に考えた場合先ばいとの間にかべができてやすくなり コミュニケーション が取りにくくなっている。	解説
10	英語では敬語がないため全員とフランクに話している気持になり ずっと楽になる。	評価
11	このようにメディアだけでなく コミュニケーション にも変化が起きることで人間関係や 人との関わり方 を大きく変える と、私は思う。	主張②
12	人間と情報の関係については個人的にかつての 情報 には本や新ぶんなどの パッケージ があったが文化が 進行 するにつれその パッケージ がうすれていっているのだ と考える。	評価

13	昔は情報がパッケージ内で包まれ、整理されていたがそれがなくなった今、 筆者の言うように 今は個々の情報をどこで区切るかを学ぶべきだと考える。	主張①
14	最後にランプや本などは一部で彼らのできることは常に求められている。	報告
15	ランプの場合は光、本の場合は情報である。	解説
16	人々がこれらを求めるのはこれからも変わらない。	評価
17	なので 変わらなければならない はパッケージである。	評価
18	本の場合はインターネットのようにパッケージそのものを無くす、あるいはランプのようにライトみたくパッケージを変更することが 大事な のである。	主張②
19	まとめると 筆者は 読者に対して新しい物をじゃけんに扱ったりひていするのではなく物が変わるように我々も適応できるように変わっていくべきだと伝えたいの <u>ではないだろうか</u> 。	論点の整理
20	そしてそれらをできる者がランプのおじいさんのように時代を切り開き、文化を守り育てられるのだと。	
総文字数		865 字

No1. は【日本語】【一貫性】の評価が低く、【引用】【読み手意識】の評価が高いという結果になった（表 1）。【日本語】では、評価者からは「漢字ではないところ読みにくい（評価者 B）」。「文体は統一されていていいと思いました。ただし、時々話し言葉の表現が混ざっているところが気になります（評価者 A）」とコメントされており、ひらがな表記と話し言葉の使用が評価を下げたと考えられる。

行 12-18 の「パッケージが薄れているところがよくわからなかった（評価者 B）」「パッケージの部分の説明が不十分（評価者 C）」というコメントがあった。なぜパッケージをなくしたり、変更したりすることが大事だと考えるかという説明の不足と、文の連節関係の悪さによって段落内の結束性が弱まっていると考えられる。また、行 11-12 は、コミュニケーションスタイルの変化という話題から課題文の内容に戻る段落間の関係性がわかりにくい。評価者からも「段落間のつながりが良くない（評価者 B）」「本論の部分が散漫である（評価者 C）」というコメントがあった。段落内・段落間の関係性、結束性の曖昧さや弱さによって文章全体の【一貫性】の評価が下がったことが考えられる。したがって、文章全体の構成を考えて書き始めること、段落間の関係性を考えて書くことというマクロ構成の意識の不足が窺える。

【引用】では、筆者の意見に「筆者の主な主ちょうは（行3）」「筆者の言うように（行13）」「筆者は（行19）」（太字、斜字）という引用のマーカを示している。筆者の意見と書き手の意見の区別に対する意識が明確であり、評価に良い影響を与えたと考えられる。

【読み手意識】では、2つの特徴が評価に影響していると考えられる。まず、行 1-3 において課題文の筆者の主張をまとめ、論点を整理し、課題文に対する自身の理解を示している点である。課題文読解型小論文において、書き手が課題文を正しく理解しているかどうかということは読み手が必要とする情報の一部であると考えられる。次に、行 4-11 まで<主張①（立場表明）→理由→根拠（具体例）→評価→主張②>という文章展開で自身の経験の引用から主張の論証を試みている点である。課題文のテーマと自身の経験を結びつけて考察する思考力と自らの意見を論理的に説明する力は読み手が求める能力であると考えられる。しかし、書かれた具体例は「情報化」から「コミュニケーションスタイルの違いや変化」に論点がずれており適切だとは言い難い。評価者からも「下線部についての意見になっていない（評価者 A）」「第 2 段落の人間関係の例はよくわからない（評価者

B)」「2～3 段落目の内容は課題文の内容と少し話がずれている感じがした（評価者 C）」と評価された。つまり、説得のための論拠が出題文の「情報化の影響」という指示に合致しておらず、出題文への対応が不十分であるという課題があり【説得力・根拠】の評価には結び付かなかつたと考えられる。

3.2 No. 2 の小論文の結果と考察

No. 2 は、【日本語】が低く、【一貫性】【結束性・構成】【レトリック】【説得力・根拠】【読み手意識】の評価が高くなった（表 1）。形式面では、798 字と字数指定が適切に守られている（表 3）。

表 3 No. 2 大学 1 年生、レポート経験あり、普通校出身者の小論文

1	現代における情報は本当にたくさんあり、たくさんのツールによって成り立っています。	報告
2	最近ではほとんどの若者がスマートフォンやアイパッド・パソコンなどを当たり前に使っています。	解説
3	スマートフォンやアイパッド等の電子機器が出る前まではわからない言葉や単語があったときは分厚い辞書を使って調べることしか出きませんでした。	解説
4	しかし今ではグーグルやサファリに単語ひとつを入力するだけでたくさんの情報がヒットし、画像や動画、さらにはそれに関わるニュースなども一緒に見ることができます。	解説
5	ですがネットワークのサービスを使う上で <u>気を付けなければいけないことがあります。</u>	主張②
6	<u>それはそこに書いてある情報を鵜呑みにしないことです。</u>	主張②
7	ネットワークサービスでは一般人が作ったサイトや動画・画像もたくさん出てきます。	根拠
8	中学生の頃レポートを書くのに必要な情報を調べて出てきたウィキペディアの情報をそのまま引用したら内容に間違いがあり先生に注意されたことがあります。	根拠
9	このようにインターネットサービスに掲載されている情報は鵜呑みにしてはいけないということが本当に <u>気を付けるべきだと私は思います。</u>	主張②
10	私自身大学生になりレポートを書く機会が多くなってきました。	報告
11	だいたいのは三百文字程度なので調べた情報も少し混ぜながら上手く書いています。	解説
12	最近では世界中でどのような使い方をすべきかと世界中で会議が行われているネットワークサービスがあります。	報告
13	それは、チャット GPT です。	報告
14	このサービスは書いて欲しい文章や単語の説明などをしてくれる <u>優秀なものです。</u>	評価
15	また文字数指定もできるため大学生のレポート作成に使っている人も多いです。	根拠
16	（しかし、）どれだけ良いレポートを作っても AI の力に頼っていては学生の力にはなりません。	評価
17	だからブルーライトを通して見れる情報ばかりでなく本や新聞・雑誌といった手に取れるものも使って上手くたくさんの情報と向き合っていくことがこれからは <u>大切になると思います。</u>	主張②
	総文字数	798 字

【日本語】では、「本当に、たくさんの、ほとんどの、といった話し言葉的表現が気になった（評価者 A）」とのコメントがあり、No. 1 と同様に話し言葉の使用によって評価が下がったことが考えられる。また、「ですますに違和感がある、だ・である体で書いて欲しい（評価者 B）」と「ですます体でも違和感がない、統一されているので。だ・である体の方が書き言葉っぽいのでいいと思うが、高校生、大学初年次生なら、ですます体でも OK（評価者 B）」「ですます体で書いていることは受け入れられた。特に違和感がない。レポートだったらダメだけど、小論文だったらどちらでもいいと習った記憶がある（評価者 A）」のように意見が分かれた。

形式段落がなく 1 段落で書かれているが（表 3）、「鵜呑みにしてはいけない、Chat GPT の 2 部構成として読んだ。意味段落で区分できた（評価者 A）」「形式的な段落はないがス

ムーズに読めた。背景、例（ウィキ、Chat GPTの例）大きな意味のまとまりが読めた（評価者 B）」というコメントがあったように、文の連節関係や、結束性の良さが指摘された。また、例としてあげられているウィキ、Chat GPTの2つは情報化の影響というテーマとの一貫性が保持されている。このことから、【一貫性】【結束性・構成】の評価が高くなったと考えられる。一方で、「鵜呑みにしてはいけない、自分のレポート、Chat GPTの関連性がよくわからなかった。本論の部分の論拠のつながりがわからない（評価者 B）」という段落間の関係性には課題が指摘された。そして、「どれだけ良いレポートを作っても AI の力に頼っているのは学生の力にはなりませんという文（行 16）は、もう少し論を展開して説明すれば良くなるのではないか（評価者 C）」という指摘があった。これは字数指定の影響から、行 16 の〈評価〉や行 17 の〈主張②〉に対する〈理由〉や〈根拠〉まで書ききれなかったことが推測される。つまり、文章全体の構成を考えて書き始めること、段落間の関係性を考えて書くことというマクロ構成への意識の不足が伺えた。

【レトリック】では、「それは情報を鵜呑みにしないことです（行 5-6）（評価者 C）」「最近では、（中略）サービスがあります。それは Chat GPT です（行 11-12）（評価者 B）」という強調構文に対する評価と、「ブルーライトを通して見れる情報（行 17）」という比喩的表現についての評価コメントがあった。評価者はこれらのポイントから【レトリック】を評価したと述べたが、レトリックは小論文に必要かという疑問の声も評価者から聞かれた。【説得力・根拠】では、情報化による影響（行 1-4）、過去の経験（行 8）、現在の自身の状況の説明（行 10-11）、社会的事実（行 7、12-13）を説明するところでは〈報告〉〈解説〉〈根拠〉の事実文を用い、〈主張②〉〈評価〉と書き分けていることがわかる。事実と意見の区別がはっきりしていることが【説得力・根拠】の評価を高くしたと考えられる。「学術的な引用ではないが、自分の経験談と Chat GPT という社会的事実を分けて書いたので、ある程度引用が使われていると感じた（評価者 C）」というコメントもあり、事実と意見の区別は【引用】の評価にも影響を与えていた。論拠としての経験談の適切性については意見が分かれた。「経験談が載せられているところで、ちょっと面白く読めるなと思った（評価者 A）」「経験談を入れると面白くなると感じる（評価者 C）」という肯定的な意見と、「感想文的な印象を受けた（評価者 B）」という否定的な意見があった。

【読み手意識】では、2 つの特徴が評価に影響していると考えられる。まず、出題文の指示の流れに対応している点である。情報化の進行の影響を説明し、現代における言葉との関わり方に対する発展的意見〈主張②〉をウィキと Chat GPT という具体例を挙げながら述べている。次に、行 1-9 で〈背景説明（報告・解説）〉→〈主張②〉→〈根拠（具体例）〉→〈主張②〉という文章展開で自身の経験の引用から主張の論証を試みている点である。No. 1 と同様に課題文のテーマと自身の経験を結びつけて考察している。しかし、「ネット上のツールを使う際の注意点になっているので、情報化の進行と人間の言葉とのつながりをテーマとしている課題文のテーマに合っているのかどうか微妙（評価者 A）」というコメントにあるように出題文で問われている論点とずれがあり、出題文への対応は不十分であるという課題が伺える。また、No. 1 との違いは、課題文からの直接的な引用がなく課題文の論点を適切に理解したかが不明であることである。「課題文から切り離して書いているので違和感を感じ、評価を下げる（評価者 B）」「今まで受けてきた教育では課題文に出てきた文をパラフレーズして入れるという指導を受けたので、違和感を感じた（評価者

C)」というコメントがあった。このことから、課題文が提示される小論文の場合は、課題文について適切に理解したことを示す必要があると考えられる。

3.3 No. 3 の小論文の結果と考察

No. 3 は 459 字と No. 1 と No. 2 に比べ分量の少なさが顕著である (表 4)。このことから、テーマに関する知識の不足、または書く内容を考える思考力が十分に身につけていないという課題が推測される。また、No. 2 と同様に形式段落がなく、1 段落で書かれているが、No. 2 と異なり文の連節関係が不明瞭で、意味段落の把握が困難である。以下、No. 3 に見られた No. 1、No. 2 との特徴的な違いについて述べる。

表 4 No. 3 高校生、レポート経験なし、普通校在籍者の小論文

1	現代における情報化の進行は人類の文化そのものを大きく変化させる、私もそう考えられる。	主張①
2	例えば本屋や雑誌以外にも新聞という問題もある。	根拠
3	昔では新聞記事から情報を得ていた部分が多かっただろう。	評価
4	しかし現在では新聞で情報を得るよりも携帯電話の速報で流れてくるニュースの方が情報も得やすくそして早く手に入れることができる。	根拠
5	ニュースはより早くより手に入れるべきでもある。	主張②
6	そうしなければもしかすると自分の身に危険が及ぶ可能性もあるからだ。	理由
7	だから人類は新聞よりもニュースを早く多く手に入れられる携帯電話を使うのではないかと私は考える。	評価
8	昔と現代では情報化も進化しており環境が全く異なっている。	評価
9	もちろんそれに伴い言葉というものととの関わり自体も変わってきているのだ。	評価
10	そのため今もこの先の情報の進行のと同じに私たち人類も言葉というものととの関わり自体を問い直す必要があるのではないだろうか。	主張②
11	前述した通り現代では新聞よりも便利である携帯電話を使用する。	報告
12	これは現代における情報化の進行は人類の文化そのものを変化させるということになるのではないだろうか。	主張②
	総文字数	459 字

まず、【日本語】の評価は No. 1 や No. 2 より高い評価であった。しかし、「より早くより手に入れるべき、情報化も進化等、表現が適切ではない部分が少し気になった (評価者 A)」、「新聞という問題もある、私もそう考えられる等、表現が不適切に感じるところがある (評価者 B)」というコメントや、「私もそう考えられる (行 1)」、「私は考える (行 7)」、「のではないだろうか (行 10、11)」という文末表現の不自然な繰り返しから書き言葉の習得が不十分である様子が窺える。これは No. 3 の協力者が本調査の前の小論文の授業で書き言葉を習って間もないことが影響していると考えられる。

次に、課題文の内容をそのまま自分の意見として書いているという課題がある (灰色の編みかけは課題文からの引用、表 4)。評価者からも、「筆者の意見とほぼ同じ意見を持っているため、特に筆者の意見と自分の意見を区別せずに書いているように見えた (評価者 A)」、「主観的な印象がある、出題文からの引用がない (評価者 B)」という指摘があった。また、No. 3 の文章には事実文が不足している。例えば行 5-10 まで意見文が連続し、行 5 「ニュースはより早くより手に入れるべきでもある <主張②>」、行 6 「そうしなけれ

ば、自分の身に危険が及ぶ可能性もあるからだ<理由>」と考えるのはなぜかという説明が不足しており、文の連節関係が不明瞭で結束性が弱い。「ニュースを知らずとも、普通の生活ができるのでは「べき」が少し強い印象を与える（評価者 C）という」評価者のコメントもあり、意見文が多く主観的な印象を与えているという課題が窺える。

最後に、No. 1、No. 2 で観察された<主張>の間に自身の経験の引用<根拠><報告><解説>の事実文を挟む論証のパターンが見られないことである。行 2 で「本や雑誌」以外に「新聞」という具体例に着目し、行 3-4 で情報を得る媒体の変化（新聞→携帯）とその理由、行 5-6 で変化に適応することの重要性を述べようとしており、課題文を身近な例に引き付けて考察していることが窺える。しかし、筆者の意見と自分の意見、事実と意見の区別ができておらず、「自らの意見」を論理的に説明することができていないという課題がある。湯浅（2023）は、初年次教育の学修の様々な局面で「要約」というスタディスキルが必要とされると指摘し、「要約」は理解したことを表現するという読解指導の段階を超えて、次なる目的（文献を引用してレポートを作成・レジュメやスライドにまとめて口頭発表）を遂行するために有効な手段であると述べている。また、同氏は「学習者が文献を読み、そこから得た知識を自身の中に取り込むインプットの過程を経て、自身の経験や自身の中にある知識をもとに他者に向けて表現するアウトプットの過程もまた、「要約」行為の結実した形と言える（p. 38）」と指摘している。つまり、本研究における No. 1 の小論文で見られた課題文の論点の整理や、No. 1、No. 2 で見られた自身の経験の引用による論証もこの「要約」のスキルの一面であると考えられる。No. 3 では、この「要約」スキルが観察されなかった。したがって、理解したことを示す「要約」と、理解したことを自己の経験に結びつけて内省し、思考したことを示す「要約」という 2 つの「要約」スキルを育む必要性があると考えられる。その際、引用や、事実と意見の区別を正しく行うことが重要である。

4. まとめと今後の課題

これまでの考察をまとめると、本研究の 3 例では表現・語彙の適切さ、段落内の一貫性や結束性のよさが読みやすさの上で重要であることが示唆される。No. 2 の小論文は 1 段落で書かれているが、もっとも「読みやすい」と評価された。No. 1、No. 3 では表現・語彙に不適切なところが多く、文の結束性にも課題があったことから、語彙力の不足が推測される。書き言葉の習得、段落間の関係性を考えて書くマクロ構成への意識、課題文の論点の正確な理解と、それに基づいた解答については 3 例とも不十分であった。

一方、大学初年次生である No. 1、No. 2 の小論文では、【読み手意識】はともに高く、課題文の理解を示すこと、出題文に対応すること、課題文の内容を経験に引き付けて思考し、考えたことについて事実文を用いて論理的に説明することが評価に影響を与えていると考えられた。【引用】については、筆者の意見と自分の意見の区別、事実と意見の区別に対する意識が重要であることが明らかとなった。文体の選択、経験談の論拠としての利用、レトリックは評価が分かれ AW の観点と小論文の観点とにずれが生じていた。それに対し、高校生の No. 3 の小論文には、指定字数を満たさない、自他の意見の区別および事実と意見の区別への意識が不足している、自らの意見や事実文による論拠が十分ではないという課題が見られた。

本研究では同じ条件下で、同じ課題に対して書かれた高校生、大学生の小論文を対象に AW の観点からの課題を分析し、高大接続のための「書くこと」の教育に資する示唆が得られた点に意義があると考え。しかし、対象とした小論文は 3 例のみと少数であるため、今後は対象とするデータを増やし調査を進めていく予定である。また、既存のルーブリックを援用しており、AW の観点からの各トレイトの適切性の議論は十分ではない。調査協力者が過去に受けた作文教育の経験が与えた影響についても十分に考察できていない。そのため、学習歴が与える影響や、高大接続に向けた小論文用ルーブリックの開発については今後の課題としたい。

(荻田朋子おぎたともこ・大阪大学大学院生・u905490i@ecs.osaka-u.ac.jp)

注

1. 荻田 (2023) では一般入試小論文を対象にした調査で、近年最も多く出題されている出題形式が課題文読解型であり、800 字の指定字数であることを明らかにしている。
2. センター報告では、実施時間は 40 分、5 分構想の時間、35 分が作文の時間、字数に対する制限はなしという条件がある。「制服の廃止」に対する 4 人の異なる意見を課題文としている。

参考文献

- 宇佐美慧 (2011) 「小論文評価データの統計解析—制限字数を考慮した測定論的課題の検討—」『行動計量学』38(1), 33-50.
- 宇野常寛 (2003) 「おじいさんのランプ」『精選論理国語』東京書籍, 194-200.
- 荻田朋子 (2021) 「『文の機能』における諸問題の検討—意見文の文章構造類型への分類に際して—」『国際学研究』10, 10-19.
- 荻田朋子 (2023) 「大学入試『小論文』で求められる『書く力』の実態調査—一般入試小論文の見直しを視座に—」『異文化間教育学会第 44 回発表抄録』, 64-65.
- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55, 9-19.
- 東京外国語大学多言語多文化共生センター (2023) 「文部科学省令和 4 年度「高等学校における日本語能力評価における予備的調査研究事業」報告書」 <https://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/3d56ceb40994eb52411b3e8cff15e7a8_1.pdf> (2024 年 2 月 2 日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 「高大接続改革の動向について高等教育局主任大学改革官説明資料 1」 <https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afiel_dfile/2017/02/15/1381780_3.pdf> (2024 年 5 月 2 日閲覧)
- 文部科学省 (2021) 「大学入試のあり方に関する検討会議提言」 <https://www.mext.go.jp/content/20210707-mxt_daigakuc02-000016687_13.pdf> (2024 年 2 月 2 日閲覧)
- 湯浅千映子 (2023) 「CEFR 補遺版の Mediation (仲介) に見る『要約』—学部留学生のアカデミック・ライティングの関係の中で—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』15, 37-45.
- 渡辺哲司・島田康行 (2017) 『ライティングの高大接続—高校・大学で「書くこと」を教える人たちに—』ひつじ書房